

## いよいよ…よいよいか？

(要介助か？付き添いか？付き人か？付け人か？切羽詰った体験をして)

うっかり背をかがめた不用意な姿勢で物を持ち上げようとして、腰の辺りがギクッと音がしたようなその瞬間から、腰から左足にかけて痛みとしびれが始まった。座っても20～30分が我慢の限界、寝る姿勢も右45度を見上げた格好のみ、家の中で伝い歩きしても10歩が精々の日々となった。これは間違いなく、ぎっくり腰。欧米流に云う魔女の一撃だろう。

1～2日様子を見て、すぐる思いで近くの「ぎっくり腰」の看板が目立つ整体クリニックのお世話になったが、電気マッサージや手もみを受けている最中は期待が持てる気分になるのだが、その時だけで一向に治ってゆく状態にならない。

念のため、かかりつけ医に相談すると、間髪を入れず「整形外科医」に行くべきと助言された。

早速、整形外科にやって来た。

レントゲンや触診、いくつかのポーズをさせられて、結局腰椎スベリ症と診断された（そういえば最初に掛かった整体クリニックでは、こんな手順はまるで踏んでない）。腰部の筋肉の炎症等でなく、腰部の骨にズレが生じたらしい。その結果、神経を圧迫しての症状が出たのだという。

整体マッサージ等はせず、痛み止めの注射と服用薬で対処することになった。血流を促進する服用薬と胃荒れを防止する薬も併用。

週2回ペースの注射で通院することになったが、その都度、妻にしっかり付き添われる身分となった。



ここで冷静に振り返ってみると、トイレにしてもお風呂にしても中腰や座位は必死の独力で頑張っていたが、もしもこの状態から脱することが出来なかつたら、それこそ「介助」の身に一步踏み込んでいたかも知れない。そんな油断ならない歳であったのだ。

そんな認識も無かったその時分、病院で待つ間の憂鬱な時間を少しは有意義にならないものか、気分を変えようと考えていた。

何回目かのある日、「柳川さん」と案内の声が掛かって医師の待つ診察室に入った。



お世話になります、お蔭さまで大分良くなっていますなどと、痛みはさほど変わらないにもかかわらず、ついお世辞のような挨拶になってしまい、先生を見上げると、これまで厳しい医師の顔に見えていた時とは打って変わり、何故か商売人のような愛想の良い顔に見えて、うっかり繁盛してますねと云ってしまいそうになった。

ひょっとして、大分良くなっています、の一言が好感度スイッチを ON にしたのかも知れない。

というのは、帰宅してそのことを話した際の妻（実は、膝関節症で同じクリニックに通って2年にもなる、いわば先輩だ）によれば、妻がなかなか快方に向わない時期のこと、さんざ診てもらっている先生に対して、痛いのがちっとも治らないと、まともに顔をうかがいながら喋った、と言う。先生だって人間だ、ムツとしたに違いない。僕はその裏返しで、先生をくすぐったのだ。それにしても、妻は勇気あるなあ、僕には出来ない。（現在、妻は結構回復して、僕から見ればまるで健常者だ）

そして、「脚が弱らないようにストレッチをしたいがどうでしょうか?」「むしろ、無理しない程度に歩いた方がよいでしょう」などと無難なやり取りを済ませて、痛み止めの注射を用意する看護師の許に移動、二の腕まで着衣を引き上げて前腕部を差し出し、注射の針先を見つめながら、緊張感を解こうと他愛ない話を切り出していた。



「今日も付き添われて来ましたが、やはりこの歳になってどうも情けないので、『付き添い』でなく、『付き人』にしてもらおうと…」などと言った途端、くっくと笑い出したのは担当の看護師ばかりでない。別の看護師にも「どうぞ、付き人さんお待ちです」とドアを開けてもらって笑われながら退室、僕は神妙な面持ちで、これから「付き人」となる「付き添い」の待つ席に戻った。

そうだ！明るく三枚目で時間を愉しもう。

二日ほど経って、看護師のもとで痛み止めの注射を受けながら、今はもっぱら室内やベランダで歩行訓練をしています、間もなく「路上歩行」に移るつもりです、などと笑わせ、

そして次の折には、「いつものことですが、妻と一緒に『多摩ビッコ隊、参上!』と言いながらこちらに伺うんです」。すると、「付き人さんとご一緒なんですね」などと返されるようになった。

こうしたやり取りを妻に話すと、いやだ！恥ずかしいから辞めて！などと嫌われたが、構わず続けた。

なお、その頃には「付き添い」「付き添われる」年配のちらほら見受けられる「構図」のカップルに気付くようになって、「付き添われる」ことにすっかり慣れてしまい、恥ずかしい感覚は皆無に成り下がっていた。

また別の日、これまでのショート・コント形式でなく、ややしおらしく「これまでの人生で、自分が気が付かない内にひとさまに痛みを与えて来たことがあったかも知れません。その報いですね。因果応報かな、我慢しないと。…『付き人』などと『付き添い』に言ったりしていたら、バチがあたる。今ではすっかり強い生きた杖ですから」などと、諦観したようなことを言ってみた。すると看護師さん、「奥さんはカミサマですね」

後日、新聞のコラムに、角界では御付きの力士の身の回りを世話するスタッフを「付け人」と呼ぶ、とあった。芸能界などのスターに積極的に自分から御付きとなる「付き人」に対して、「させられる」受動的な意味合いを持っているとか。

そうすると、僕の連れは一体どちらになるのだろうか？

そんなこんなのお世話になって二ヶ月余、あの痛みはすっかりどこかへ飛んで、漸くこうして投稿文を座って執筆できるところまで来た。まだ左足に違和感はあるものの、一時間以上は歩けるレスクワットもできる、寝る姿勢も自由になった。

いよいよ…が、良い良いに済んで、ホッ！

